
アイデンティティー

蒼月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイディンティティー

【Nコード】

N9475T

【作者名】

蒼月

【あらすじ】

同じ顔の異母妹と恋人の浮気に心を痛めていた時、事故に遭い記憶をなくした真奈。そして真奈の事故現場を目の当たりにした恋人は、初めてどれだけ彼女を愛していたかを思い知る。その上、事故の加害者となってしまった青年が真奈を甲斐甲斐しく看護するため、真奈がその青年に引かれ始めた・・・。

プロローグ（前書き）

見切り発車のシリーズです。

プロローグ

ああ・・・やっぱり・・・

ホテルから出てきたばかりの男女を呆然と見つめつつ、頭ではその場を離れるようにと足に指示を出す、まるで根が生えたみたいにならない。

目の前を歩く男が女性の腰を引き寄せ仲睦ましく歩く。――本来ならばそれは自分であるはずだった。だが男性が引き寄せている女性には自分ではない。たとえ自分と同じ顔をしていてもそれはまるっきりの別人。

――異母妹^{いもめい}の佳奈だ。

同じ父親のDNAと母親が双子のため、これまた同じDNAを持つて産まれて来た。ただし、正式な嫡子は佳奈――所為、私は愛人の子供・・・。

それでも彼は『一生懸命なキミが好きだ』と照れながら告白して来た。のに、わずか一週間で彼は佳奈と身体の関係を結んだ。その後彼らは身体の間を続けている。そして彼は何もないかのように

に私を抱く。

——大切な宝物のように、真綿に包むように、この上なくやさしい手付きで……。

啄ばむように何度も何度も、キスを交わす二人の姿に止めどなく涙が溢れ、目の前が滲んで行く。そして心は声にならない悲鳴を上げ、張り裂ける。

もう嫌だ……見たくない。なのに磁石のように体が吸い寄せられる。

一步、二歩と近づくも、悲痛の叫びは彼らに届くこともなく、涙を流し続ける私に気づかない。

どこか遠くの方で鳴り響くクラクション。急いでブレーキを掛ける音が微かに耳に入り、かろうじてそちらに顔を向ける。途端にドンッという衝撃が身体を襲い、そのまま弾き飛ばされ宙を舞う。

宙を舞いながら薄れいく意識の中で彼らに視線を向ければ、やっところちらに気づいたのか、驚愕の顔をしてこちらを見た彼と目が合った。彼が必死に何かを叫んでいたが、それを理解するまもなく、私は完全に意識を失った。

プロローグ A (前書き)

サブタイトル変えました。
真奈の恋人視点です。

プロローグ A

クラクションが鳴り、続いて急ブレーキの音。何事かと思い後ろを振り向いた瞬間、あまりの事に十数秒、身体が凍ったように動けなくなった。

車に撥ね飛ばされた女がまるでスローモーションのように弧を描きながらゆっくりと、でも地面に叩き付けられた。その女の顔を見た瞬間、頭が真っ白になる。何かを考えようとするも、まるで脳が考える事を放棄したように何も浮かばない。ただただ、壊れた人形のように横たわる女——真奈と視線が交差しただけだ。

「——もしもし?! 聞こえますか?! しっかりしてください
」

微動だにしなかった俺とは違い、運転していた男が車から慌てて飛び出し必死に真奈に呼びかける。

「——救急車を呼びました。もう直ぐ来ると思います。だから・
・・!」

——横たわる真奈に必死に呼びかける男。

——虚無の瞳を俺に向ける真奈。

俺は・・・何をしてる・・・？

血溜まりに横たわる女は自分の恋人なのに、こんなところでいたい俺は——・・・

無意識に何かを叫び、俺は真奈に向かって走り出していた。

プロローグ A（後書き）

短くてすみません。

プロローグ A、(前書き)

第3者視点です。恋人サイドより長いです。

プロローグ A、

——いったい何度キミが涙を流せば彼らは気づくんだろう。愚かな事をしていると言う自覚が、果たして彼らにあるんだろうか？

一条大輔^{いちじょうだいすけ}。営業一課のエースで彼女——玖流真奈^{くりゅうまな}の恋人。そして大輔の浮気相手……。彼女の異母妹の西園寺佳奈^{さいおんじかな}。

どんなに姿形が似ていても、その身に宿るものは大きく違う。勝気な性格の佳奈に対して自己主張が苦手な真奈。大輪のバラのように華やかな佳奈と、霞み草のように脇に転じる真奈。

真珠のような涙を一粒、二粒と零しながら、声を殺して泣く彼女を見たのは3ヶ月前だった。偶々見かけたその顔に訳のわからない衝撃を受けた。身体に電撃が走ったように痺れ、その小さな身体を抱きしめたいという思いと、何故そんなことを思ったのかという自分戸惑った。

その日から彼らを見かけるたびに俺は、無意識に彼女を探していた。そしてこの思いを自覚するのに然程時間は掛からなかった。俺は彼女が好きだと・・愛しているのだ、と。

彼が何故、彼女の異母妹と関係を持ったのか、分からないし知りたいとも思わない。ただ、これ以上彼女を泣かせるのなら・・・この思いを断ち切ることはしない。そう、それこそどんな手を使っても、彼女を手に入れる。

——そう誓ったのは3ヶ月前・・そして今、彼女はまた静かに泣いているのだ。

ハンドルを握る手に無意識に力が籠る。車を止めて様子を見ていたが泣きながらふらふらと近づく彼女になんとも言えない思いが過ぎる。

——彼らは彼女に気づかない。気づこうともしない。それなら・
・

——奪ってもいいよな・・・？

プロローグ A、（後書き）

名前がまだ出ませんが決して名がないわけじゃありませんよ？（汗

episode

ああ・・・誰かが私を・・・呼んでる・・・

誰・・・？　誰が私を呼んでるの・・・？

薄っすらと開けた瞳に映るは、顔色を失くした男性が覗き込むようにしてこちらを見ている姿。薄茶色の双眸は不安に揺れ、血まみれの自分の姿が映し出されている。

あれは・・・私？　じゃああそこに居るのは誰？

混濁する意識の中で慌ただしく、こちらに向かって駆けて来る男性とその後ろに居る自分と同じ顔の女性――・・・

ああ、そうだ。あれは佳奈だ。私の異母妹。そして一緒にいる男性は恋人の一条大輔。でも変ね？　二人の方が恋人同士に見えるなんて・・・

「――――ッ?!」

自分の目の前の男性が必死に何かを叫んでいる。が、その声は、最早耳には届かない。

「――――ッ!」

ごめんなさいね、あなたが何を言ってるのか分からないの。・・・それにもう、あの二人の事は見たくない・・・

恋人である大輔と異母妹を焦点の中々合わない瞳で見つめながら、真奈の意識は緩やかに闇に吞まれて行った。

そして白い壁に囲まれた病室で目覚めたとき、心を引き裂く辛い出来事に関する記憶を一切無くしていた。

episode 2 (前書き)

真奈が目覚めるまでの話です。
後半を付け足しました。

episode 2

「――いくら謝罪したところでお嬢さんの身に起こった事を、無かった事になど出来ない事は重々承知しています。ですが本当に申し訳ありませんでした。」

病室に入ってくるなり加害者である彼はそれこそ土下座するほどの勢いで被害者である真奈の母親にひたすら謝り続けた。

「いいえ、警察の方のお話では真奈の方にも非が有るとの事でしたし・・・」

「いいえ、私です。私が悪いのです。いくら急いでいたと言っても前方不注意で事故を起こしたのは私なのですから。」

「沖田さんがすべて悪いわけではないんです。道路の真ん中をふらふらと歩いていたあの娘が悪かったのです。」

「ですが・・・」

「もうこの話は止めましょう。幸い怪我は思ったほどひどくはなかったようですし、後遺症についてはまだなんともいえないとの事

でした。ただ・・・」

「傷跡は残るのですね・・・？」

言いづらそうに顔を伏せた真菜の母親にそっと聞くと微かに頷かれる。

「本当に・・・申し訳ありませでした。」

何かを耐えるように真奈の母親は首を横に振りながら、

「ちょっと失礼しますね。せっかく頂いたお花をこのままにして置くのはなんなんで・・・」

沖田が持って来た見舞いの花束を持ちながら真奈の母親は、少しの間真奈を頼むと言って病室を出て行った。そして病室に自分たちだけになるとくると向きを変え、ベッドで眠っている真奈に近づく。

そっと手を伸ばし撫でるように額から頬へと指を滑らせ唇でその手を止める。柔らかな唇の感触と微かに指にかかる呼吸にホッとすらも、その指の腹で唇をなぞりそっと呟く。

「残るほどの傷跡を付けた俺を恨むか？ 真奈。けど俺はそれでも嬉しいんだ。その傷がまるで俺のモノだっていう証しるしの様な気がして。」

仄暗い笑みを浮かべながら沖田は真奈の唇に己のそれを重ねる。ゆっくりと舌で輪郭をなぞり真奈の唇の感触を思う存分堪能する。温かくて滑らかで柔らかで・・・つつい深いキスに移行しそうになるがそこはグツと堪える。

名残惜しげに唇を離すと沖田は再び頬に手を沿えそつと呟く。

「また来るよ。」

と――。

episode 2 (後書き)

やっと名前が出てきました。(苗字だけですが) 誰のことかわかりますか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9475t/>

アイディンティティー

2011年8月16日02時24分発行